

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

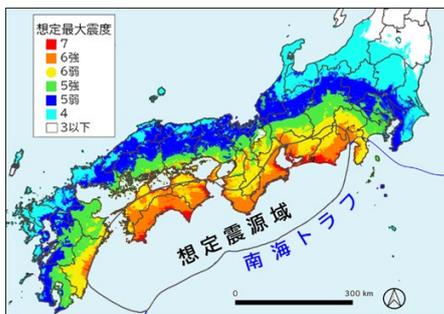
Contents

1. 南海トラフ巨大地震の被害想定見直しへ
2. 5月でも熱中症に気を付けて
3. お天気よもやま話
～GWの山岳遭難



1 南海トラフ巨大地震の被害想定見直しへ

近い将来発生が予測されている南海トラフ巨大地震。発生した場合に想定される被害について、公表から10年余りが経過したことから、来年春をめどに見直す方針との報道がありました。ここでは、そもそも南海トラフ地震とは何なのかについて振り返ってみます。



南海トラフ巨大地震の想定震源域と想定される最大震度分布図（内閣府資料を基に作成）
黒線で囲った領域が南海トラフで発生する最大クラスの地震の震源域。静岡県から宮崎県にかけての広い範囲で震度6強以上になると想定されている。

繰り返し大規模な地震が発生しており、その時の揺れや津波の様子が日本書紀などの古文書に文字として残されています。こうした古文書等の調査によって、南海トラフ沿いではM8クラスの巨大地震が概ね100～200年間で繰り返し発生していることが分かっています。南海トラフ地

左図に示したように静岡県の駿河湾から紀伊半島沖及び四国沖を経て宮崎県の日向灘沖までのフィリピン海プレートとユーラシアプレートが接する海底の溝状の地形を「南海トラフ」といいます。この南海トラフ沿いでは、これまでに繰り返

震の発生の仕方には多様性があり、駿河湾から四国沖の広い領域で発生したこともあり、一部の領域が時間差を置いて発生したこともあります。その事例としては、安政東海地震（1854年）の32時間後に安政南海地震（1854年）が発生、昭和東南海地震（1944年）の2年後に昭和南海地震（1946年）が発生などが知られています。

政府の地震調査研究推進本部によると、今後30年以内に南海トラフでM8～M9クラスの地震が発生する可能性は70～80%で非常に高い数値です。一方、最大クラスの地震の発生頻度は、100～200年の間隔で繰り返し起きる大地震に比べて一桁以上低いと考えられています。

これらの地震が社会に対する影響の甚大さから考えても、日本で近い将来発生する可能性のある地震の中で最も重要なものの一つであることは間違いありません。

最悪の場合、死者が32万人を超えるなどと想定されている南海トラフ巨大地震。被害想定を見直すことになった背景には、大きな被害が想定されている地域で進められている津波避難タワーなど施設の整備や避難行動対策の取り組みなどのハード・ソフト両面の対策が進んでいる一方で、人口減少や高齢化が進み、都市部で超高層ビルが相次いで建設されるなど新たな課題が出てきていることもあるそうです。



2 5月でも熱中症に気を付けて

5月と言えばゴールデンウィークもありますし、行楽にはもってこいの季節ですね。上着はいらなくなって、とても過ごしやすい季節です。

ところで、熱中症は真夏の「病気」と思いがちですが、実は5月にはすでに注意しないとイケない状況になります。

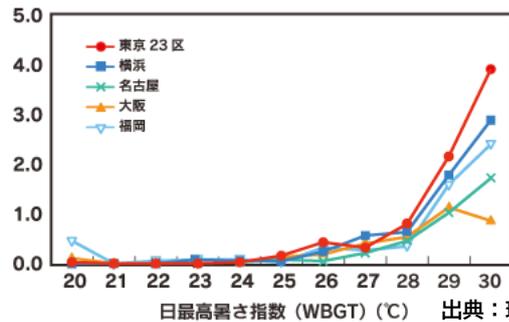
例えば、東京の5月1日の最高気温の平年値は22.0度ですが、31日には25.1℃まで上昇します。東京では5月末には夏目になるのは普通のこと、過去には、2019年の5月26日には32.6℃の最高気温も観測しました（5月の最高気温の記録）。「春」というよりも状況によっては「真夏」と考えた方が良くもかもしれません。

熱中症は、気温が高かったり、湿度が高い環境のなかで、体内の水分や塩分のバランスが崩れて身体が環境に適応できなくなっておこるさまざまな症状の総称です。

気温や湿度などが関係してくるため、一概には言えませんが、おおむね30℃を超えるようになると熱中症になる可能性が大きくなります。また、身体の調整機能とも関係しますので、前日と比べて急に気温が上昇するような時には

より危険性が高くなります。さらに、身体が、暑さに慣れていないとより熱中症になりやすいと言われます。同じ気温、例えば32℃でも5月と9月では、5月の方がより熱中症になる可能性が高いです。5月でも熱中症に気を付けないといけないのはこのような理由があるのです。

環境省と気象庁では、熱中症の危険性が極めて高くなると予測された際に「熱中症警戒アラート」を発表して警戒を呼び掛けています。熱中症を予防するためにはこの情報を活用することや、気温が急に高くなったり、30度を超えるような予想が出た場合には、エアコンの活用や水分補給に努めましょう。



左図の数は熱中症患者発生率(人口100万あたり)
※WBGTとは
気温、湿度、日射等を取り入れた指標
28℃(気温換算で31℃前後)を超えると急激に患者が増えることがわかる

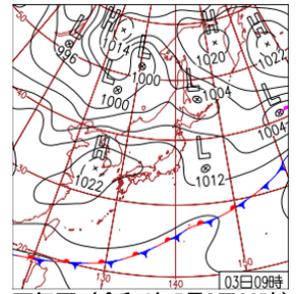
出典：環境省HP

3 お天気よもやま話 ~GWの山岳遭難

4月末から5月の初め、ゴールデンウィークのころは春の盛りで、旅行や登山など戸外での活動に良い時期です。一方で思わぬ事故が起こるのもこのころです。特に山岳での遭難は毎年のように繰り返されています。昨年〔令和4年〕もGWの期間中に155件、188人もの山岳遭難が起り、10道県で10の方が亡くなり、7県で7の方が行方不明となりました。低山では新緑が美しくなり、高い山でも雪解けが進むころで、登山に出かける人が多くなります。しかし、この時期、高い山ではまだまだ冬のような天気が見られることも珍しくありません。山岳遭難は転倒や滑落、落石などによる事故もありますが、最も多いのが悪天候や気温の低下、雪崩など気象の要因による遭難です。経験豊富な登山者でも、天気の急変や気温の低下は遭難の危険を招きます。

本州中部の山岳地帯ではGWのころ、標高1500m付近の気温は7℃前後、標高3000m付近では-2℃前後です。ただ、これはあくまでも平年の値で、低気圧が抜けて天気が回復してくるタイミングで寒気が入ってくると、これよりもず

っと低い気温となります。図は昨年、令和4年5月3日の天気図です。気圧の谷が東に抜けて、高気圧が西日本から東日本を覆って来ています。下界では穏やかな春の陽気になっていますが、上空には強い寒気が入り、本州中部の1500m付近で0℃、3000m付近では-9℃前後まで気温が下がりました。穏やかな天気が予想されていた下界とは異なり、標高の高い山では雪や冷たい雨が降りました。登山の際には下界の天気だけではなく、特に上空の寒気の動向にも注意を払う必要があります。現在の気象の予測技術では、高い山で天気の急変をもたらす状況も数日前から予測することが可能です。天気予報や気象情報に注意を払うだけではなく、登山予定の山やその周辺の天気、気温の変化について地元の気象台に直接照会してみることも有効です。こうした情報をどのように利用し、適切な判断につなげるか、特にこの季節の登山では最も心がけるべき点でしょう。



天気図 (令和4年5月3日09時)



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

